

会員番号 450 青木信二 (神奈川県厚木市)
融合研神奈川支部長・森の里地区青健連会長

プロローグ

森の里地域は、厚木市にある世帯数 2,354 世帯、人口 6,649 人ほどの地域で、28 年前に開発された新興住宅地です。小中学校と高校や大学があり、企業の研究施設が誘致され、研究学園都市として位置づけられています。住民のほとんどは市外の出身者であるために、森の里に住み始めた当初より自慢できるふるさとづくりをしようと、年間通して地域活動が盛んな地区であります。

そのような環境の中で、2001 年に森の里中学校 P T A が学校・家庭・地域という三本柱の中で子どもたちを育てようと地域に呼びかけました。

1. 中学生の活躍がきっかけで地域と学校が目覚めた！・・・ P T A と地域と学校の融合

森の里中学校 P T A は地域の各種団体へ「主催事業を実施する際、中学生が参加（ボランティア活動）できる場を検討していただけないだろうか」と申し出しました。その反響は意外と大きく、多くの地域団体から賛同するとの返答をあり、年間を通して様々な地域事業で中学生が活躍できる場が整いました。中学生が地域社会の活動に積極的に参加する事で、まちづくりに参画する意識を育てることができる。また、地域の人とのふれあいを通して、学校や家庭では経験できない学びがあると考えたからでした。名づけて P T A 活動「地域ふれあい事業」の誕生でした。今年で 13 年目、多くの方々の思いと熱意で徐々に拡大し、そして継続されてきました。その間、年間延べ数百人の規模の中学生が地域で活躍し、年々着実に地域に根づきました。今では、地域側からすれば、中学生無しには地域事業ができないと言われていています。このように、地域社会の中で中学生が活躍することで地域と学校が目覚め、今までにない視点から地域や学校の様々な活動を見直すきっかけをつくりました。中学生にとっても、地域にとっても、もちろん学校にとっても、WIN・WIN の関係がもたらす大きなうねりを呼び起こし、さまざまな実践例が生まれていました。それを紹介します。



中学生の祭り設営ボランティア

2. 地域側から仕掛けた・・・様々な融合の発想で生まれた実践例

(1) 「森の里防災キャンプ」2004 年～・・・「P T A と自治会と学校が融合」

ある日、森の里中学校 P T A 父親委員が呼びかけました。「学校のグラウンドでキャンプがしたい」、「何とかならないだろうか・・・」。この課題に対して、地域側も学校側も、そして大人も子どもも、お互いに利点があれば無理なく実現できるのではないかと、ある発想が閃きました。「学校のグラウンドは防災訓練の場所である。防災訓練の一環としてできないだろうか。」早速、学校と自治会に持ちかけ、特に自治会は、子どもが参画することで防災訓練が活性化するし、現実問題として昼間地域に居ない大人に代わって、非常時に子どもも地域の力になるのではと考えたのです。日程は防災訓練の前日から宿泊し、翌日はその



グラウンドにテント設営

まま自治会主催の防災訓練に参加するというものでした。中学校PTAの父親委員が発案だったにもかかわらず、地域の小中学生を受け入れ、防災訓練場である学校のグラウンドでのテント宿泊でした。小学校や中学校のグラウンドで、毎年交互にテント宿泊しています。さらに避難所開設訓練も加わり、公民館と地域育成団体、自治連などが予算を出し合い、地域ぐるみの共催となっています。子どもも大人も楽しみながら学び、継続した活動に進展し続けている一例です。

(2) ミニもり（森の里）プロジェクト 2006年～・・・「地域子ども事業と地域事業が融合」

子どもが自ら考え企画し、経営して稼ぐ、そして得た報酬を使うという擬似社会を体験させる活動が全国各地で開催されています。大人は見守り、影ながら支援する、あくまで子どもの意志を尊重し、自らの考えで行動させる「子どもの国」事業です。当然ながら、森の里においても森の里らしい「子どもの国」を作ろうという動きとなり、「ミニもりプロジェクト」が生まれました。森の里らしいとは・・・単独の新たな事業ではなく、地域事業の祭りで大人が活動する中で、子どもたちが「働き、稼ぎ、使う」そのような体験の場が出来ればと考えたのです。また、それは地域事業に参画するということであり、子どもたちは地域事業のお客様ではなく、地域事業の主催者として立派な仲間入り（パートナー）を意味します。祭りなどの大人の模擬店に混じって、子どもたちが模擬店を企画運営し、報酬を得る、そして得た売り上げから報酬を得て使う、もう擬似社会体験ではありません。そんな活動を森の里クリスマス祭りで実践し続けています。今年で8年目、継続は力なり！今では地区内他の祭りでも「ミニもり」を実践し、地区全体で徐々に関心が高まっています。そんな元気な子どもを見ると大人も負けられません！地域の活性化にも一翼を担っています。



ミニもりショップで大活躍

(3) ふれあい喫茶の授業@森の里小学校 2007年～・・・「地域福祉事業と小学校の授業が融合」

森の里地区地域福祉推進委員会が主催している「ふれあい喫茶」は、家に閉じこもりがちなお敬老の方々に地区内で「憩いの場」を提供しようという活動です。会場が自治会館でしたが、施設的にゆとりのある学校の余裕教室を利用できないかと声が上がりました。しかしながら、学校施設の開放はなかなか容易ではなく、余裕教室を貸してもらいたいとの要望も答えは「No」でした。ですがこれもまた、地域側と学校側にお互いに利点があればいいのではと発想を変えてみました。「ふれあい喫茶」に集まるご敬老の方々の知恵袋を拝借して、教科の授業が展開できたらどうなるか・・・また、帰宅する際は児童と一緒に帰れば児童の安全につながるのでは・・・それは、地域側にとっても普段の活動の延長であり、学校側にも学校教育に大きなメリットがあります。学校施設の中でご敬老の憩いの場である「ふれあい喫茶」を提供するとともに、地域側がコーディネータになって、また、学校側は教科の流れに沿って教員だけでは教えられないテーマを見つけ、ご敬老の方々による年間を通しての授業を展開しました。実践してみるとおじいちゃんやおばあちゃんはとても話し好き！授業時間がいつも足りません。今となってはうれしい悩みとなっています。各学年、月に一度程度の授業となり、年度始めの企画会議や年度終わりの反省会議などを積み重ね、年々バージョンアップしています。当然ながら、「ふれあい喫茶」が提供する飲み物やお菓子などで児童とご敬老の方々とふれあうドリンクタイムもあり、児童も一緒に飲み物を注文し、学校だけでは体験できない光景も見られます。地域側にとっては次のステップにつながるうれしい展開であります。



森小のふれあい喫茶授業

(4) 中学生被災地支援ボランティア 2011年～・・・地域・学校・公民館の融合

東日本大震災発生から「何かを支援せねば・・・」「継続した支援とは・・・」と数々の思いが駆け巡る日々でしたが、そんな中、2001年度から継続してきた森の里中学校生徒による地域ボランティアの実績と森の里地区青健連の社会体験事業が融合すれば、中学生による被災地支援ボランティアが出来るのではないかと思ったのがこの事業の始まりでした。2011年9月に多くの方々や団体から賛同を得ながら本事業実行委員会を立ち上げて、安全に確実な活動にするため数ヶ月かけて練り上げ、数度の現地視察や保護者説明会、中学生事前研修などの事前準備を経て、2012年3月に1泊2日の支援事業を実施しました。訪問地は厚木市立相川小学校が石巻市の同名の小学校校支援活動から両校長の紹介で石巻市立相川小学校区の2つの仮設住宅とめぐり逢い、「児童とのふれあい活動」「仮設住宅の花壇づくり」「最盛期のわかめ収穫作業支援」など3点の活動に縛り、森の里中学校を通して募集し自らの意思で参加した森の里中学校の生徒と森の里地区ジュニアリーダーとともに現地に臨みました。

2013年3月には第二回目の事業を行い、昨年度の活動に加えて、仙台市の荒浜地区農地での瓦礫処理や仙台市立七郷中学校の生徒との交流活動も新たに実践しました。

中学生による被災地支援ボランティアの目的とは、中学生といえども人のために役立つことの大切さを自覚し、自ら行動する勇気を持ち、東北地方の復興の一助になればと願ってのことです。

ふたつめの目的に、「体験に勝る学びはなし」と言われているとおり、この被災地支援ボランティアを通して大震災の惨状を深く心に留め、大震災の記憶を風化させたくないとの願いがありました。さらに加えて、大人と子どもが共通の活動を通して、「ともに学び、ともに成長する(育つ)」ことが出来れば、それは人としての生涯学習でもあり、また、広い意味で世代間を結びつける地域づくりになりえるだろうと確信したからでした。片道600キロを超える行程にもめげず実践する、学校や公民館がこれを支援する、まさにこれができるのは地域が育ち、信頼できる力となり、地域と学校と家庭が関わり続ける普段からの活動・事業のおかげではと考えています



仮設住宅で中学生の花壇整備

3. 今ある地域の既存事業や既存組織をフル活用して・・・

このように、中学生の活躍がきっかけで地域が目覚めて、融合の発想から様々な実践が生まれました。その特長について整理したいと思います。そこには大げさな言い方かもしれませんが、森の里のシステムが垣間見えます。

- ① 今ある地域事業や既存組織が融合(協働)することで、地域の子供達には地域の中で活躍する機会、学ぶ機会が生まれました。そのような活動を体現し、そして関わることで地域の大人が変わってしまった、変わらざるを得なかったと言えます。今から考えると、子どもが橋渡しとなって、新たな視点で地域全体がつながり活性化に歩み始めたのではないかと考えられます。
- ② 面倒だからと既存地域組織同士が背を向けることなく、それぞれの地域組織が主催する地域事業が融合(WIN・WINの関係で結びつく)することで、公民館、学校、自治会、子ども会育成会、PTA、青健連などがつながり、組織の枠を超えた横つながりの関係が自然と生まれています。「新たな組織」や「新たなシステム」が先ではなくて、今ある活動・事業が融合の発想を意識して実施すれば、それを通してつながりが自然と出来てきたと思われます。

- ③ 行政などが呼びかけ主導する活動（トップダウン方式と呼んでいます）ではなく、やりたい時にやりたい人が活動・事業をコーディネートし、融合（協働）する。そのような真に地域からのボトムアップの活動を基本としています。だから継続するのです。
- ④ 「子どものため」「〇〇のため」「・・・ねばならない」という義務的な活動でなく、地域の子どもと関わることで、大人自身も楽しみ、学び、成長することを根本としています。
- ⑤ 実践しただけで終わらず、実践を踏まえて研修（発表）する。そしてまた実践する。この繰り返しを年間通して継続的に実施することを意識しています。これが次のステップへと進む大きな力になっています。

また、課題点もいくつかあります。

- ① じゃ誰がコーディネートするの？ コーディネートは誰？・・・その人材を育てることが大切であり、怠るとたちまち活動・事業は形骸化し、負担感だけが残ります。
- ② 継続は地域活動の生命線でもありますが、形骸化しないために新たな視点を創出する知恵をつけなければなりません。絶えず学び、あたらしい視点にたつ勇氣と挑戦が必要ではないかと思っています。

このように森の里地区の実践には本来の学社融合でない事例も多々あります。しかしながら、学校と地域の融合教育を考える上では、行政や学校と同時に、まず地域側が成長しなければ信頼も得られないし、継続もできないのです。行政や学校が主導している時期はそれでもいいのですが、いずれ、そこに永く住み続ける地域住民が一翼を担わなければなりません。そのためには、あらゆる活動を通して絶えず実践を積み重ね、融合（協働）することが無理なく持続可能な活動・事業が展開でき、新たな価値観を生み出すことを地域側がまずは体現することが必要と考えています。そういう意味で、融合の発想とは子どもたちの成長とともに地域の活性化につながる、そして地域の成長につながるという「まちづくり」そのものであると確信しています。分科会のテーマとおり、「学社融合による地域づくり」がまずは大切ではないでしょうか。

4. 「ともに学び」、「ともに育つ」・・・地域で育つ子どもたち

多くの実践を通して、大人が地域の子どもと関わることで、子どものためだけでなく、同時に私たち大人自身の成長につながっていることを自覚しなければならないと思います。負担を感じながらの活動ではもう維持できません。そこから一歩抜け出し、子どもと関わりながら、まずは大人自らが楽しく、生き生きとした活動を実践すること、それが大切だと思います。そうすることで、無理なく継続した活動が展開でき、おのずと人と人を結びつけ、知らず知らずと子どもを育む環境づくりができるのではと考えます。

融合の発想で、・・・「ともに楽しみ」、「ともに学び」、「ともに育つ」・・・このような実践が展開し続ければ大きな前進があるでしょう。これが地域の力になると確信しています。